（三）第1192号　【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】　みいけ　（毎月2回1日16日）　1982年12月1日（水）

原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百十六号

昭和35年7月、三池闘争のさなか二小地域分会（荒尾）に入った道炭労オルグ、貝島オルグとともに。（いちばん左が坂口龍平さん）

原告団レポート

遺　族——

坂口トシ子さん

記憶の底で

「ちょうど買い物をしていた時でしたから、三時過ぎでしたね。背中を押されるような『ドスーン』というものすごい音がしました。

家へ帰って、ラジオを聞いてますと、三川鉱で爆発があったらしいということなので、おじいさんと二人で、荒尾市四山上区の竜平（たつよし）さんの家に行きました。あの日は二番方でしたからね。

バスで三川鉱の通りを行くときは、もう混雑していました。

家では、まだ誰も知りませんので、三川鉱の正門に行ってみました。寒い夜でした。夜遅くなって組合事務所で待ちましたがわからず、翌日十時頃でしょうか、天領病院でやっと会えたのですが…」

井上ハジメさん（七十五歳、坂口トシ子さんの実母）は、その夜のことを語ろうとしない。「もう忘れました」という。あまりにも強烈に焼きついている、あの日の記憶を掘り起こしたくないのかもしれない。

トシ子さん（当時二十八歳）は、十二月に出産をひかえた体であり、心痛をかけまいとする父母の苦労は、筆舌しがたいものがあった。

二人の青春

トシ子さん（昭和十年八月二十九日生まれ）は、大牟田市原山町百七十六番地の井上俊雄・ハジメ夫妻の二女として育ち、学校を卒業すると市内の某化粧品店に勤めていた。

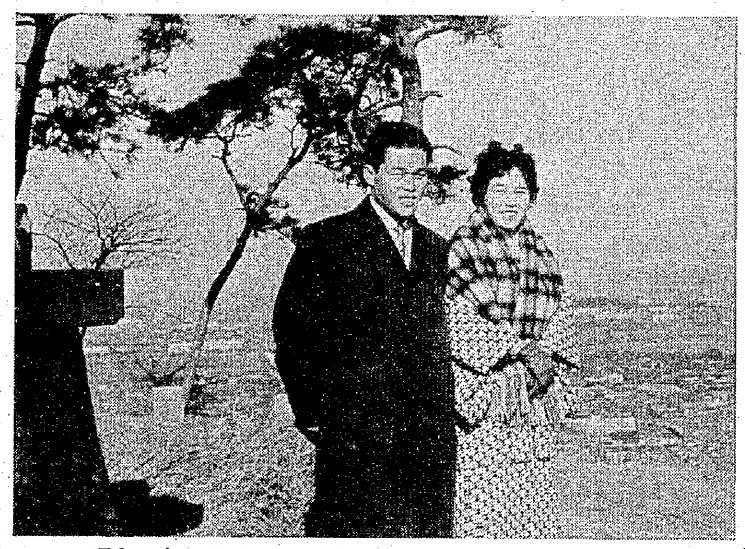
坂口竜平さん（昭和七年二月十七日生まれ）は、荒尾市上区六百六十五番地で育ち、昭和二十一年四月一日三川鉱に入社している。

二人が知り合ったのは、昭和三十三年一月三日、佐賀の裕徳稲荷への三社まいりの会員バスの中だった。

「よか人でした。前々日でしたか、午前中、恵子（昭和三十六年十一月二日生まれ）を自転車に乗せて、ぶらっと遊びに来ましてね。おじいさんとよく話の合う人で、焼酎を飲んで帰ったのですが」と、ハジメさんは、昨日のことのように話しする。

時折りパチンコをして休むくらいで、仕事は満勤した。小さな手帳には、きれいな字で毎日の細かなことを簡潔に書いてある。カメラを愛好し、写真の一枚一枚にも日付と短かい文がある。

こうした几帳面な性格をかわれ、昭和三十七年から二小校区地域分会の役員をしていた。



昭和35年の元旦、虚空蔵さん（四山神社）に一家で詣で、大牟田・荒尾両市を見渡す高台で。（龍平さんとトシ子さん）

泣く子に、「父ちゃん返せ」と

夫の命を奪われた痛み

ばあちゃん、曽孫を抱くまで元気で

大牟田市原山町の実家でトシ子さんと母親のハジメさん。

「ほがらかな人で、三池闘争中は、オルグさんとすぐ仲が良くなりましてね。私たちより、むしろオルグの方々が印象深いのではないかと思いますよ」と、同じ地域分会の役員だった松田さんや村本さんは、昔を思い出す。

開発乙方、仕繰工であった彼は、いつものように二番方に出勤した。おそらく水平人車を降り、現場へむかう途中だったと思われる。当時、三十一歳だった。

父母の援助

「父や母に言葉で出せないくらい、世話になっています」と、トシ子さんは言う。

二歳になった恵子さんと、生まれたばかりの浩子さん（昭和三十八年十二月二十四日生まれ）を抱え、わけあって実家の世話となり、縫製工場で働くことになった。昭和三十九年四月入社時、日給三百二十円だった。親子三人が食べていける給料ではなかった。

実父、井上俊雄さんは昭和十二年、宮浦鉱を退職している。坑内でポンプ運転中、機械にまかれて右手指四本を失くしたからだ。

坑外で働くよう話もあったが、十八年間勤めた坑内から、建築の仕事に職をかえた。

「俺も炭鉱で指を失くし、娘婿の生命までとられた。この孫たちは、炭鉱ん者にゃ嫁にやらん」と言っていたとか……。

焼酎を少々飲み、月二回ほど映画を見にいく程度で、病気もせずに働いていたが、昨年十月七日亡くなった。七十九歳だった。

縫製工場へ

二人の子供をあずけ、トシ子さんは病弱の身で縫製工場に働きに出た。動力ミシンを使い、季節ごとの寝具類を加工するのだが、はじめはなれぬせいか休みがちだった。

「CO協定をめぐって本社での座りこみが夜遅くまで続いたときでした。母乳をミルクにかえてはいましたが、あの時は浩子が泣いてどうにもなりませんでした。

私も会社に対して腹立たしくなり、抱いて外にでました。すぐそこが三井本社ですから、父ちゃんば返せていうてこいと、泣く子に言うたもんです」

ハジメさんは、何度も思い出したくないと言いながら、会社に対する怒りをのべる。

あずける身も、あずかる身もつらかったに違いない。

トシ子さんは、家族の力でなんとか今日まで、勤めることができたという。今では病気することもなく、休まずに出勤しているが、給料は手取り十万円に満たない。

「勤続十八年になるんですよ。やがて娘たちに追いこされます」と淋しく笑う。

力合わせて

上の娘の恵子さんは、高校を卒業し、市内の病院の事務員として、下の娘の浩子さんも高校を卒業し、薬品会社の事務員として働いている。来年一月は成人式を迎える、すでな立派な社会人となった。

「恵子は勤めから帰りますと、必ず仏さん（祖父、父）に参ります。感心な娘です」と、ハジメさんは孫の成長ぶりに眼を細くする。

今年はおじいさんの初盆だったので、大阪に嫁いでいる姉妹たちが、孫をつれて帰ってきた。

末妹のテルミさんもいた。爆発前、よく四山上区の坂口宅まで一人で遊びに行っていた。看護学校へ入るまで、二人の娘たちの面倒をよくみたという。

日一日が、まさに家族ぐるみのたたかいだった。

未来に託す

「来年は大阪の娘の家に行こうと思ってます」ハジメさんが楽しそうに言う。

「ゆっくり骨を休めてきて下さい」と、そばでトシ子さんが言った。苦労の連続だった母親に、これから少しでも楽にしてもらいたいという気持ちなのだ。

「もっと長生きして、孫の嫁に行く姿と、曽孫を抱くのを楽しみにしてます」という。

坂口家の夕食は遅い。みんなの顔がそろってからなので、夜七時を過ぎる。それまで、ゲート・ボールや草花の手入れをする。

トシ子さんも、最近は身体も強くなり、毎朝出勤して五時過ぎに退社する。みな、あたりまえの生活のリズムの中にある。

しかし、炭じん爆発によって、夫の生命を奪われ、家族含めてどん底の道を歩いてきた痛みは消えない。

二度とこのような大災害を起こさせないために闘っている裁判も、やがて十年を迎える。トシ子さんは、家族みんなに支えられ、裁判の勝利まで頑張らねばと決意する。

玄関の下駄箱の上には、よく手入れのゆきとどいたシャコバサボテンの、大型品種であるデンマーク・カクタスが、びっしりと花芽をつけている。

その花芽のように、ハジメさんもトシ子さんも、未来にゆるがぬ確信を持っている。

×　×